**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第３９回　（２０１７年　１２月１９日）**

**・第３９回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」１４頁**

・📖 （読む）「師と弟子」１４頁上段Ｌ２～Ｌ１４

*魚をとるために湖水の中に網が投げられたとする。ある魚はじつに利口で、決して網にかからない。彼らは、つねに永遠に自由な魂に似ている。しかし大部分の魚は網にかかる。そのあるものはそれから逃れようと努める。彼らは、解脱を求める連中に似ている。しかし、努力する魚の全部が成功するわけではない。ごくわずかのものたちが、大きな水しぶきをあげながら網の外に飛び出す。そのとき漁師は、『ほら！大きな奴が逃げていくぞ！』と叫ぶのだ。しかし、網に捕えられた魚の大部分は逃げることができないし、逃げる努力もしない。あべこべに、彼らは網を口にくわえたまま水底に穴を掘り、『恐れる必要はない。ここで十分に安全だ』と考えてその中にじっと横たわっている。哀れな奴らは、漁師が網とともに自分たちをひきずり出すであろうことを知らないのだ。これらは、世間に縛られている人びとに似ている。*

（解説）

人は四つの階級に分けられます。

1. **束縛された人々：　baddha** **jīva 　バッダ・ジーヴァ**

世間に縛られている人びと。執着、欲望がいっぱい、神様のことを知らない、思い出さない。解脱のことも知らない。世俗的なことが好きな人々。

1. **解脱を求めている人々：mumukshu jīva　ムムクシュ・ジーヴァ**

「この世での束縛された奴隷の状態はもうけっこうだ」と考えている人は解脱が欲しいです。そしてそのためにいろいろと実践をします。その中には解脱できる人もあればできない人もいます。

1. **解脱した人々　mukta jīva　ムクタ・ジーヴァ**

以前は束縛された状態でしたが、束縛が好きではないので解脱のためにいっぱい頑張って、解脱できた人です。悟った人、ふつうの聖者です。

1. **永遠に自由な人々　nitya jīva　ニッティヤ・ジーヴァ**

最初から束縛されず、自由で、生まれる前から解脱がありました。皆さんを導くため、神様を助けるために、この世に現れました。

これらは解脱と束縛という観点から見ていくと分りやすいです。（１）は束縛された状態、（２）、（３）のムムクシュとムクタはムクティ「解脱」という言葉から派生した解脱にまつわる状態で、ムムクシュは「解脱が欲しい」、ムクタは「解脱した」を意味します。（１）のバッダは「束縛された」という意味で、ムクタの反意語です。

この４つの分類にはありませんが、（１）’「神様のことは好きですが、解脱を求めていない人びと」について、詳しく説明します。なぜなら、私の観察では、信者の中にもその種類の人が結構多いからです。

**（１）’ 神様のことは好きだが、解脱は求めない人々**

私の観察では、「神様のことは好きで、神様に祈り、ジャパや瞑想もするが、解脱は求めない」という人が神様の信者の中にも結構います。

皆さん個人的に内省をして考えてみてください。

今の本当の状態は、無知の状態、マーヤーの影響で束縛された状態、そして奴隷の状態だという意識を持っていますか？

また、その状態は好きではない、いやだという認識はありますか？

もしくは大変な状態のときはいやでも、らくな状態が続くと大変なときをすぐ忘れ、「このままで構わない」と思ったりしませんか？

何も問題がないときでも「私は奴隷の状態」だと考える人、いつもそのような状態だと考える人、束縛された状態はもういい、もういやだと考える人は、解脱が欲しいです。

そして、次の段階（ムムクシュ・ジーヴァ）に行くにはその考えが出て初めて進むのです。

一方、このままの状態でも構わないと思っている人びとは解脱はしたくなく、いくら瞑想をし、祈りをし、神様が好きで信者であろうともバッダ・ジーヴァにかわりありません。そして私の観察ではその種類の人がとても多いように思うのです。

お坊さんの中にも、「このままで構わない」と考えている人がいる可能性があります。僧院に入って、もしその僧院の経済状態が良いと、何も心配することがありません。自分の決まった仕事をするだけで終わり。食事や衣服の心配がありませんし、年を取って病気をしても面倒を見てもらえる準備もあります。そうするととてもらくですね。そして解脱のためにお坊さんになったということを忘れる可能性があります。

信者にもその可能性があります。今の生活が好きで、「束縛された状態にいる」という気づきがないからです。らくな時、問題がないときに、識別して識別して、いつも、「自分が束縛された状態である」や「奴隷の状態である」と考えるのは尋常ではないほど難しいです。「解脱を本気でするぞ」と考えて、やる気を出すのは非常に難しいです。

Fanciful imagination空想的に、例えば「月に旅行に行ったほうがいいかなあ」という程度に「解脱をしたほうがいいかなあ」とときどき考えて、また普段の生活の戻るというのは、解脱を求めているとは言いません。

一体どれくらいの人が「今の生活はもうけっこう、もう十分です」と思って、本気で解脱を求めているでしょうか。

**（１）’ の人々がなぜ進めないか**

**解脱という目的がないと、欲望、執着を取り除くためのやる気が出ない**

識別をして、「我々の本当の状態は奴隷の状態だから大変だ」、といつも考え続ける状態にならないと、欲望、執着は絶対に続きます。そして欲望、執着があると進むことはできません。

「欲望、執着を減らす」という考えは、信者なら持っているかもしれませんが、「欲望､執着を取り除く」ということと､「欲望､執着を減らす」ということは異なります。

解脱という目的がないと、欲望、執着を取り除くという明確な想像ができないですね。

しかし解脱という目的があれば、欲望、執着を取りのぞきたいと思い、前進するのです。

**解脱のイメージ**

ところで解脱に入らないと解脱とは何かということはわかりません。

世間で我々は「少しの自由、少しの霊的楽しみ」を経験できても、「絶対の自由、絶対の至福」の経験は解脱に入らないとできません。

そこで解脱のイメージを助けるようアイデアを挙げていきます。

・魂の本性が解脱（＝我々の本性は解脱）。

・我々の魂の本性は「絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福、そして絶対の自由」。

・解脱は二度と生まれ変わらないことである（転生しない）。

肉体レベルで説明すると、もう人間という形をもって生まれない、ということです。我々はこの世に肉体をもって再び生まれると、また体の奴隷になりますね。しかし、もし、解脱をして自分が「意識だけ」、つまり、この世に生まれるときに持たなければならない「体や感覚がない状態」になると、体や感覚の奴隷になる可能性はありません。

解脱は「意識のレベルだけで自分が存在している」ということを理解してください。そのイメージはちょっと難しいですね。けれども、それが本当は理論的です。

・また、解脱した人の例を考えてみるとよいです。例えば、お釈迦様、タクール、イエス、スワーミージーの状態をイメージしてみてください。それが解脱の状態です。彼らと自分の状態を比べてみれば、さらにはっきり分かると思います。

例えば、タクールの状態は、

いつも喜びの状態が出ています

何にも束縛されておらず、いつも自由です。

無知もない、楽しみ、苦しみ、束縛もない。

普遍的。愛も普遍的です。

でしたね。

そうした悟った人の状態と自分の状態を比べてみてください。

すると解脱のイメージが出る可能性があります。そして解脱のためのアイデアが出ると、解脱のためのやる気が出ます。そして解脱のための実践が始まります。

**束縛から解脱へと向かうギャーナ・ヨーガの道**

一方､ 束縛された状態は決して普遍的ではなく、絶対に狭いです。

ここで束縛について考えてみます。なぜなら束縛された状態がわからなければ、解脱のイメージもやる気も出ないからです。

まず、一つ一つ、自分の状態について、識別し、深く考えてみてください。

たとえば肉体の奴隷（肉体の要求に応じて飲食、排泄、睡眠などをして肉体維持をしなければならない等）、感覚の奴隷（視、聴、臭、触、味覚の五感はそれらがある限り使われなくてはならない等）、心の奴隷（心に欲望が起こるとすぐにそれを満たしたくなる等）、記憶の奴隷（思い出したくない記憶を思い出す等）、人間関係の奴隷（結婚したら自分の自由が減る等＊結婚が悪だという意味でなく、今は自由という基準から識別しています）について。

すると、いかに自分に自由がなく、奴隷のように束縛された状態であるかが分かるでしょう。

またこれは、どこの国に生まれたとか何の宗教かなどに関係なく、ひとたび人間として生まれたら、生まれ変わり続ける限り、その状態も続くのです。

そして結果として、苦しみ、悲しみがあります。なぜなら我々の本性は「絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福、そして絶対の自由」であるのに、今の状態はそれからはほど遠い、自由のない束縛された状態ですから。

しかし、解脱をすれば、「絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福、そして絶対の自由」となります。

以上は識別（ギャーナ・ヨーガ）の観点からみた解脱と束縛のイメージですが、

さらにバクティ・ヨーガの解脱へのチャレンジについて、説明していきます。

**神様を生活と人生の中心にすることで解脱へ向かう、バクティ・ヨーガの道**

ふつう、信者は神様が好きです。神様を思い出し、神様に祈り、神様を瞑想し、聖典の勉強をします。ですけれども（１）’の信者の場合は神様が生活と人生の中心になっていません。

しかし、もし神様、シュリー・ラーマクリシュナが生活の中心になれば、ギャーナ・ヨーガの解脱と同じことです。神様が中心になると、神様の恩寵で、すべての束縛が取り除かれるからです。そして転生もしません。

内省してください。

我々の生活の中心は､家族､仕事､などではなく､シュリー・ラーマクリシュナでしょうか？

シュリー・ラーマクリシュナは我々の生活のすべてのやり方、考え方の中心になっていますか？

毎日の生活のやり方、考え方、または夢の中で、そして目覚めたとき、中心はシュリー・ラーマクリシュナでしょうか？

人間関係、仕事、すべての中心はシュリー・ラーマクリシュナでしょうか？

そのように、もしすべての中心がシュリー・ラーマクリシュナになると、解脱の状態です。

そのとき肉体と心はありますが、肉体、感覚、心の影響は大きくありません。それらがないに等しいくらいの影響しかありません。

我々の今の状態は、もし大変な状況になると、すぐにその影響で、心の平安がなくなります。しかし、大変な時でもシュリー・ラーマクリシュナが自分の中心であれば、その状況に対して「傍観者」となることができます。それだけではなく、大変な状況の中にもシュリー・ラーマクリシュナがいらして、危険も、この大変な状況もシュリー・ラーマクリシュナから来ました、と思うことができるのです。

バララーム・ボシュが最初にタクールに会ったとき、こう尋ねました、私は神様が好きですがどうして神のヴィジョンに恵まれることがないのか、と。タクールも質問で答えました、あなたは自分の家族と神様と、どちらが好きですか？　と。バララームは率直に、私は自分の家族が一番好きです、と答えました。しかしその状態でいるあいだ、我々が神様のヴィジョンに恵まれることはないのです。

このように、私たちの解脱へのチャレンジには二通りあります。

・今は束縛の状態だからそれを取りのぞいて解脱が欲しい。［ギャーナ・ヨーガ］

・神様が生活と人生の中心になる（＝いつでもin every situation、何でもin every work、どこでもin every place、誰でもin every person、シュリー・ラーマクリシュナが中心となる）［バクティ・ヨーガ］

両方とも結果は同じ、解脱＊です。

＊解脱には２種類ある。

・生きているあいだの解脱、ジーヴァン・ムクティ。

・肉体を去ったあと神様の恩寵で解脱する、ヴィデーハ・ムクティ（デーハは体、ヴィは否定の接頭辞）。

　ムクティとは二度と人間の命で生まれず、神様の場所に行くこと。

傍観者のようにすべてを神様の遊びとみて、苦しみ、悲しみ、欲望、執着なく生きている人はジーヴァンムクタである。（肉体・心・感覚はあるがその影響はごくわずか）

**バガヴァッド・ギーターの解脱の教え**

バクティ・ヨーガの解脱について、ギーターではこのように言っています。

バガヴァッド・ギーター　第9章27節

*君が何をようと、何を食べようと、何を供えようと、何を人に与えようと、どんな修行苦行をしようとクンティー妃の息子（アルジュナ）よ！　全てを私への捧げものとするがいい。*→　それがやり方です。

第9章34節

*常に私のことを想い、私の信者として、私を供養し、礼拝するがいい。君が私を最高の目的とし、常に君の心を私に結び付けているならば、君は必ず私のもとへと到達する。』と。　　　　　　　　　　　　　→*それが解脱です。

第12章8節

*それ故、常に私のことのみを想い、己の知性のすべてを私にねるがいい。そうすることにより、君は疑いなく、これから常に私の中に住むこととなる。*

すべてのやり方、すべての考え方の中心がシュリー・ラーマクリシュナ、または自分の信じる神様です。そしてその結果、悟ります。

どの節もみんな同じことを言っていますね。そしてギーターの最後のほうで、最終的にもう一度言っています。

第18章66節

*あらゆる宗教の形式をけ、**ただひたすら私に頼り、服従しなさい。そうすれば、私がすべての悪業報から君を救ってあげよう。だから、なんら心配することはない。*

「あらゆる宗教」の宗教という言葉は正しい翻訳ではないですね。ヒンドゥ教、キリスト教、仏教、その宗教の意味ではありません。ある宗教をやめて私に帰依しなさいという意味ではありません。

「あらゆる宗教の形式を斥け」というのは、家住者の義務、お坊さんの義務、戦士のカーストの義務、などのさまざまな義務、また聖典の中の、ヤッギャ（犠牲供養）、沈黙や断食などの苦行などの条件について、「それらを何も考えないで、ただ私（クリシュナ神）だけ、神様だけに集中して考えてください。神様だけを自分の中心としてください」という意味であり、

ギーターの中でシュリー・クリシュナがアルジュナに教えた哲学やヤッギャを「すべてやめて、私だけ、私のことだけを覚えていて、いつも思い出してください」という意味です。

そうすれば、「私の恩寵ですべてのカルマ、すべての罪を取り除きます。束縛からあなたを解放し、そして解脱をあげます」、つまりこの節後半の「悪業報から君を救う」、これが私（シュリー・クリシュナ）つまり神様の約束だと言っているのです。

神様を生活と人生の中心にすることで解脱へ向かう、バクティ・ヨーガの道と同じです。

「いつでもin every situation、何でもin every work、どこでもin every place、誰でもin every person、シュリー・ラーマクリシュナが中心とする」のです。

さらに、「生きているあいだだけでなく、死んだあともシュリー・ラーマクリシュナが中心です」──その感じで我々は祈ったほうがいい──「シュリー・ラーマクリシュナ、生きているあいだもあなた、死んだあともあなた」そう祈ると、解脱できます。

このアイデアならイメージは簡単につくと思います。がしかし、実践は難しい。なぜなら「すべての状況の中に、すべての人の中に、すべての仕事の中に、いつでも神様を見る」というのは、簡単ですか？　簡単ではないです、すぐにエゴがすぐに出てきて、「好き」だの「嫌い」だの「らく」だの「らくではない」だのと考えますから。

そこで実践的な助言を三つします。

一つは「すべてが神様」という印象を深めるために、まず、一つ一つについて神様をイメージするよう生活することです。たとえば食事の前に唱えるマントラ（ギーター4章24節）も「すべてに神様をみる」と同じことで、「食事はブラフマン、食事をよそう柄杓はブラフマン、食事をする人はブラフマン」と言っていますが、Mさんは、もっと細かく「カレーはシュリー・ラーマクリシュナ、水はシュリー・ラーマクリシュナ、魚はシュリー・ラーマクリシュナetc.」と考え生活していました。そのように、一つ一つについてシュリー・ラーマクリシュナだと考えると、突然にはできませんが徐々に、すべてにシュリー・ラーマクリシュナをみるようになります。

二つ目は、神様＝ブラフマンと考えずに、もっと自分に近しい対象、たとえばシュリー・ラーマクリシュナ、シュリー・クリシュナ、イエスなどと考えることです。そうすると、もう少しイメージができるのではないかと思います。

三つ目は心の準備、つまり心を清らかにすることです。なぜなら心が清らかにならないと欲望と執着はなくならず、欲望と執着があると「すべてに神様をみる」ことは難しいからです。

**（１）’ の人々が進むには、解脱までのやる気が必要**

今まで我々の人生のために大事なディスカッションをしてきました。すなわち「神様は好きだが、解脱は求めない」人たちのチャレンジと実践についてです。しかし、個人個人が、「どうして10年、15年、信者（やお坊さん）としてやってきているのに、進まないのか」、「進まないのは何が問題か、何が障害か」を考えなければ結果は出ません。ただ聞いているだけでは、勉強しているだけでは結果は出ません。解脱までやる気がないと、進めないです。「らく」だけでは進めない──また生まれて「らく」して、また生まれて「らく」しての繰り返しが続くだけで、進むことはありません。しかし、解脱したいというやる気があれば、今生で解脱することも可能です。最後はシュリー・ラーマクリシュナの恩寵です。お任せすれば、できます。

・📖 （読む）「師と弟子」１４頁上段Ｌ１５～下段L６

*縛られた魂たちは、『女と金』というによって世間に結びつけられているのだ。彼らは手も足も縛られている。『女と金』が自分を幸福にし、安全にすると考えて、それが自分を破滅に導くということは悟らない。このように世間に縛られている男が死に臨むと、彼の妻がたずねるのだ、『あなたは死のうとしていらっしゃる。しかし、あなたは私に何をしてくださったのですか』と。また、世間の事物への彼の執着はじつに強いものだから、ランプが明るく燃えているのを見ると、『ランプを暗くせよ。油を使いすぎる』などというのだ。しかも彼は、死の床にいるのだよ！*

*縛られた魂たちは決して神のことを考えない。ちょっとでもひまがあれば、くだらない雑談やばかげたおしゃべりにふける。または、益のない仕事に従事する。もし彼らの一人に理由をたずねるなら、彼は答える、『はぁ、私はじっとしていられない性分でしてね、それでをつくっているのです』と。時間をもてあますと、彼らはたぶん、カルタをはじめるだろう」*

（解説）

それはふつうのことですね。退職した人を観察しますと、仕事がなにもなく、ここに書かれているのと同じような状態であるのがわかります。

ふつうの見方では、そのことはなにも問題がありませんね。非道徳的な仕事をしているわけではないので、もちろんそれで構いません。みなさん、誤解しないでください、シュリー・ラーマクリシュナは霊的な見方で言っています。

霊的な見方では、その状態は、「束縛された状態」です。シュリー・ラーマクリシュナや、お坊さん、信者の見方では、それは束縛された状態ですが、ふつうの人の見方はそうではないので、「自分の状態が良くない」とは考えないです。なぜならふつうの人には、神様、霊的な生活のイメージがありませんから。

その人たちを批判するのは良くないです。その種類の人の理解は、霊的な生活を送る人とは違いますから、その感じで続いていきます。

**自分の信念を貫く**

神の信者が他の人を批判するのは良くないですが、もし他の人が信者を批判した時は、「私の理解は、あなたとは違います。自分の特別なやり方、生活があります。神様を理解してその考えでやっています」と考えてください。自分のやり方が正しいと考えると、それを貫いてください。それくらい、つよい心の意思が大事です。

霊的な見方が一番大事だと理解したなら、絶対それに従ってください。そうしないと、たとえば、他の人に批判されて、「霊的なやり方は、ちょっと恥ずかしい、やめたほうがいいかもしれない」と考える可能性もありますでしょ。もし、絶対自分は正しいと思ったなら、絶対やってください。

**霊的なことを知らないと、霊的生活を始められず、時間を無駄にする**

もう一つ大事なことがあります。

どうして時間はあるのに神様のことを考えるために時間を使わないのでしょう。二つあります。

・霊的なことを全然知らない、またはあまり知らない。神様のことを聞きますが、霊的な生活のことがよくわからない。

・60歳、65歳まで全然神様のことを考えないで仕事をしてきて、退職してから神様のことを考えようと思っても、無理なようです。頭では神様のことを考えたほうがいいと考えていても、年を取ってからではほとんど無理みたいです。そのために前から実践しないといけません。

そのために、インドではできるだけ子供の時から神様のことを考えることを始めたほうがいい、と考えられています。しかし、「神様のことは年を取ってから考えればいい、今は考えなくていい」と大きく間違った考えの人がいっぱいます。

実際年を取ってから、ほとんど神様のことを考えない、または考えたいですけれども、大変です、難しい。その感じで時間を無駄に使っています。

我々はラッキーです。なぜなら、何が神様で、何が真理、何が霊的な生活か、ということを少なくとも聞いたことがある。そしてそのことについて、話し合ったり、話を聞いたりしています。

そこから解脱のためのやる気が出るかどうかは、ケースバイケースです。

・📖 （読む）「師と弟子」１４頁下段L７～１３

　*部屋には深い沈黙があった。*

*ある信者「師よ、ではそのような世俗的な人間には救いはないのでございますか」*

*師「それはあるとも。ときどき高徳の人びととともに暮らし、ときどきひと気のないところに行って神を瞑想するのだ。その上に識別を行って、神に、『私に信仰と帰依する心をお与えください』と祈らなければならない。*

（解説）

**シュリー・ラーマクリシュナの助言の特徴**

・シュリー・ラーマクリシュナはとても楽観主義です。

「もちろんできます。この方法があります」と言っていますね。

・助言の中には特別な難しい哲学のことはなにもないです。

・実践のことだけがあります。

・簡単な言葉を使って、とてもとても大事なことをコンパクトに言います。

そして、ここでは４つの助言をしています。

1. ときどき高徳の人びととともに暮らす
2. ひと気のないところに行って神を瞑想する。
3. 識別をする。
4. 私に信仰と帰依する心をお与えください、と祈る。

今、4つの助言の一つ一つについて集中して考えてください。

そうすれば、その中にどれくらいアイデアが入っているかが理解できます。

例えば、「神聖な交わり」についてのアイデアはいっぱいいっぱいありますね。

「ときどきひと気のない場所で神様のことを考える」ということの中にもいっぱいアイデアが入っています。

「識別」についての哲学の本はいっぱいあります。ヴェーダーンタの中にアイデアがいっぱいありますね。

「祈り」についてだけを論文のテーマにして大変大変勉強をしている方もいます。

スワーミージーが「シュリー・ラーマクリシュナの一つの助言だけをテーマにとりあげても、大きな本を作ることができる」と言っていました。

・シュリー・ラーマクリシュナの助言は短いですが、内容はとても深いです。

・シュリー・ラーマクリシュナの助言について、集中して理解してください。

・シュリー・ラーマクリシュナは何を言っているのか、本当のことはなにか。

最初は自分のレベルで理解していってください。

（第3９回『福音』勉強会）以上